

7. 大阪湾・瀬戸内海

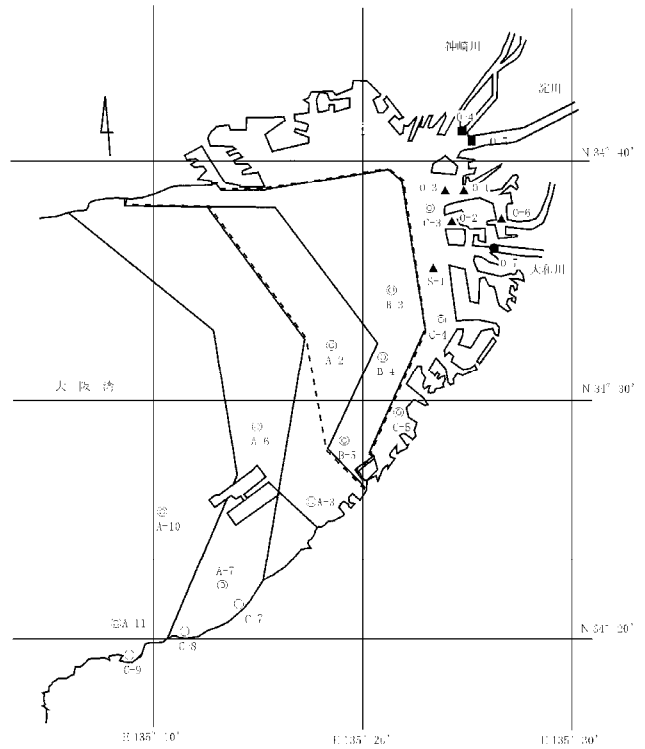
瀬戸内海沿岸では、昭和48年に瀬戸内海環境保全特別措置法が制定されて以降、COD総量規制やりん等の削減指導、下水道整備などが行われており、水質は全体的には改善してきたが、近年は横ばい状態である。また、栄養塩類等の流入によって赤潮が発生し続けている。

(1) 大阪湾内の水質

大阪湾は、A、B、Cの3海域に分け、それぞれ類型指定されている。CODは、表層、底層とも湾奥部になるほど高くなる傾向を示している。C海域では環境基準（C：8mg/l）を達成しているが、A、B両海域では環境基準（B：3mg/l、A：2mg/l）を達成していない。

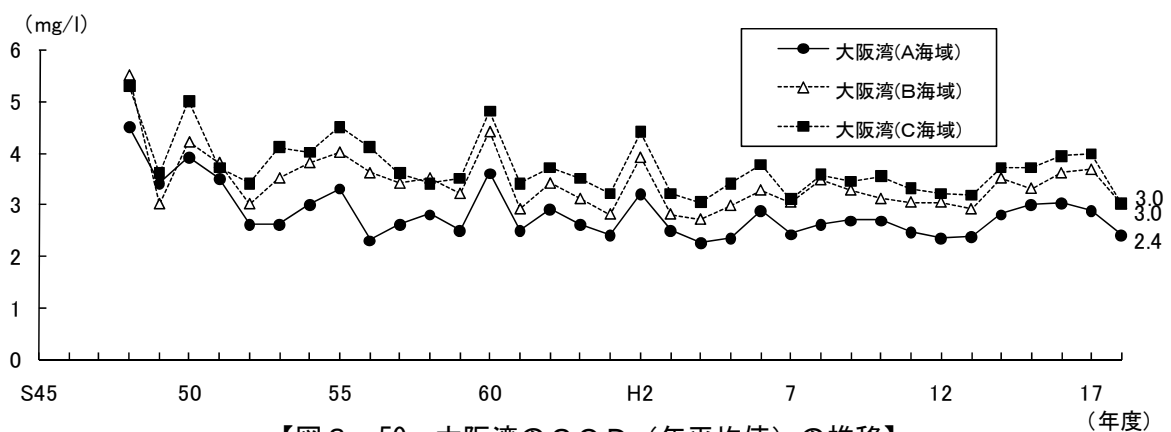
平成18年度のCODの年平均値はA、B、C海域、それぞれ2.4、3.0、3.0mg/lであった。湾全体の透明度の年平均値は4m前後で推移しており、平成18年度は4.8mであった。

大阪湾は、閉鎖性水域であるため、富栄養化に伴う赤潮が発生しやすい。平成18年の赤潮発生件数は24件であった。



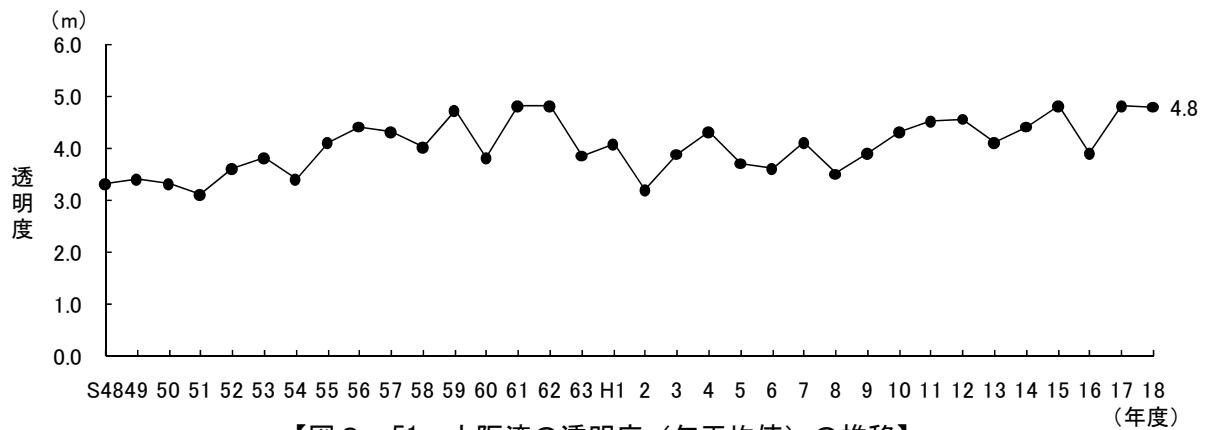
【図3-49 大阪湾の海域】

出典：平成18年版 大阪府環境白書



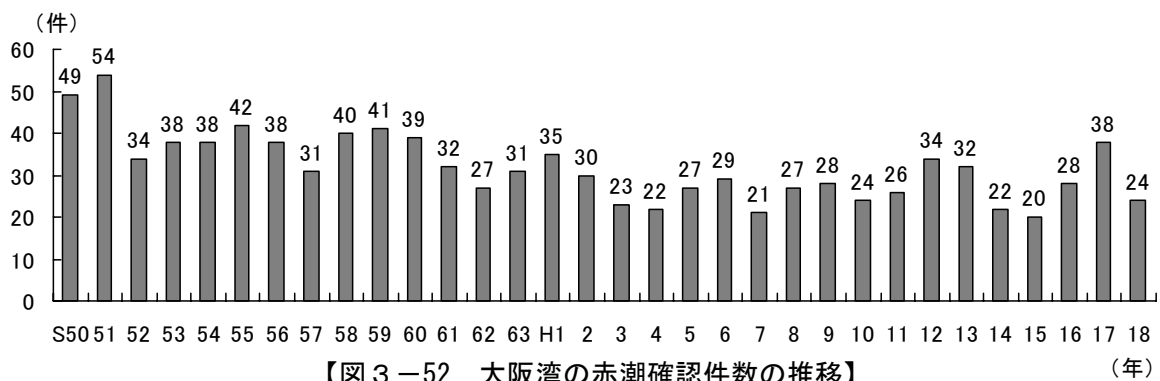
【図3-50 大阪湾のCOD（年平均値）の推移】

大阪府環境白書より作成
詳細は資料3-7を参照



【図3-51 大阪湾の透明度（年平均値）の推移】

注) 数値は湾内15地点の平均
大阪府環境白書より作成 詳細は資料3-6を参照



【図3-52 大阪湾の赤潮確認件数の推移】

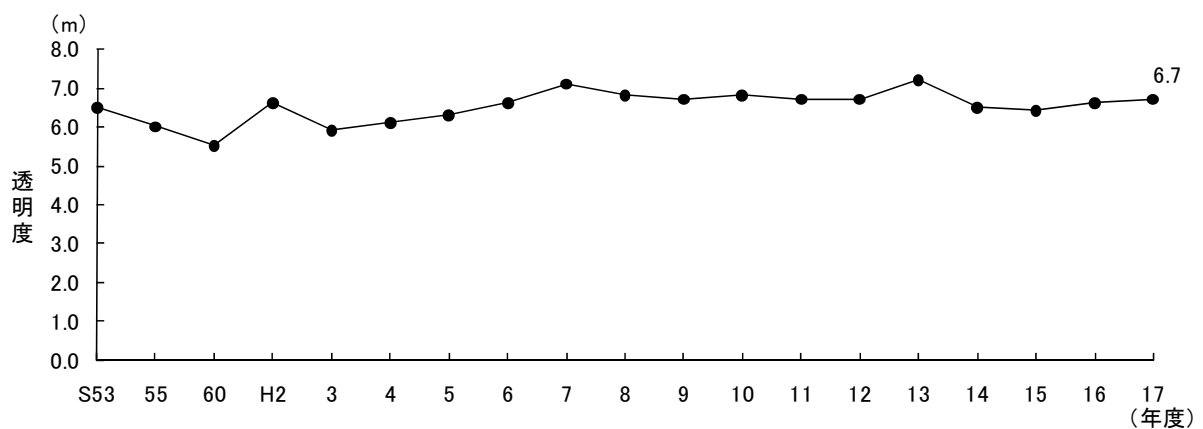
水産庁瀬戸内海漁業調整事務所「瀬戸内海の赤潮」より作成

(2) 瀬戸内海

大阪湾沿岸部には特に汚濁源が多い。

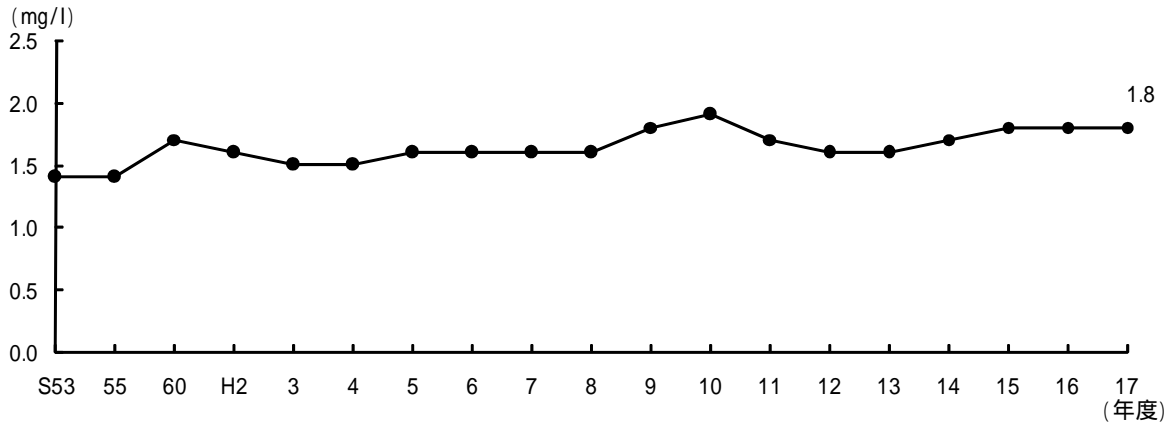
平成17年度の瀬戸内海の平均の透明度が6.7m、平成17年度のCODが1.8mg/lに対し、大阪湾北部はそれぞれ3.7m、2.6mg/l、大阪湾南部は7.4m、2.1mg/lとなっている。

また、広範囲にわたって赤潮が多発しているものの、昭和51年度の299件をピークに減少し、その後、漸減傾向にある。平成18年には108件の赤潮が確認された。



【図3-53 瀬戸内海の透明度の推移】

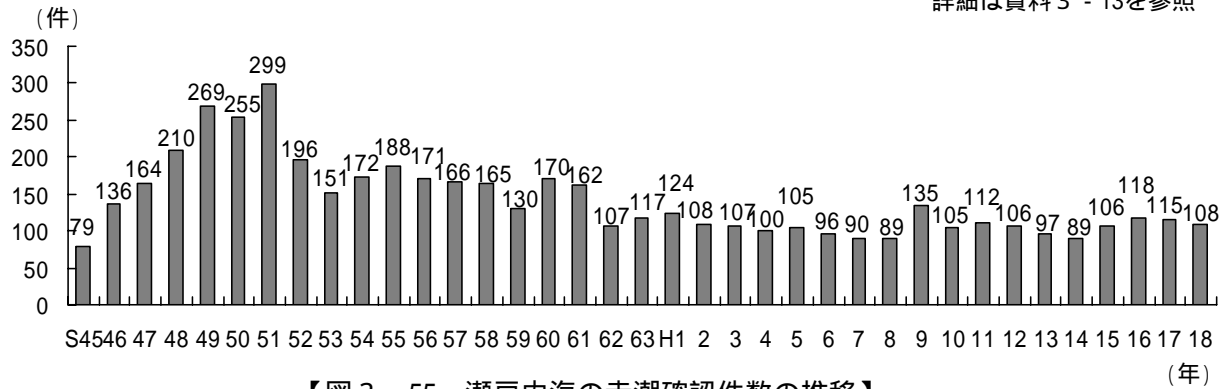
せとうちネット「自然環境に関する情報」より作成
詳細は資料3-12を参照



注) 数値は測定点ごとの年平均値を灘ごとに平均したもの

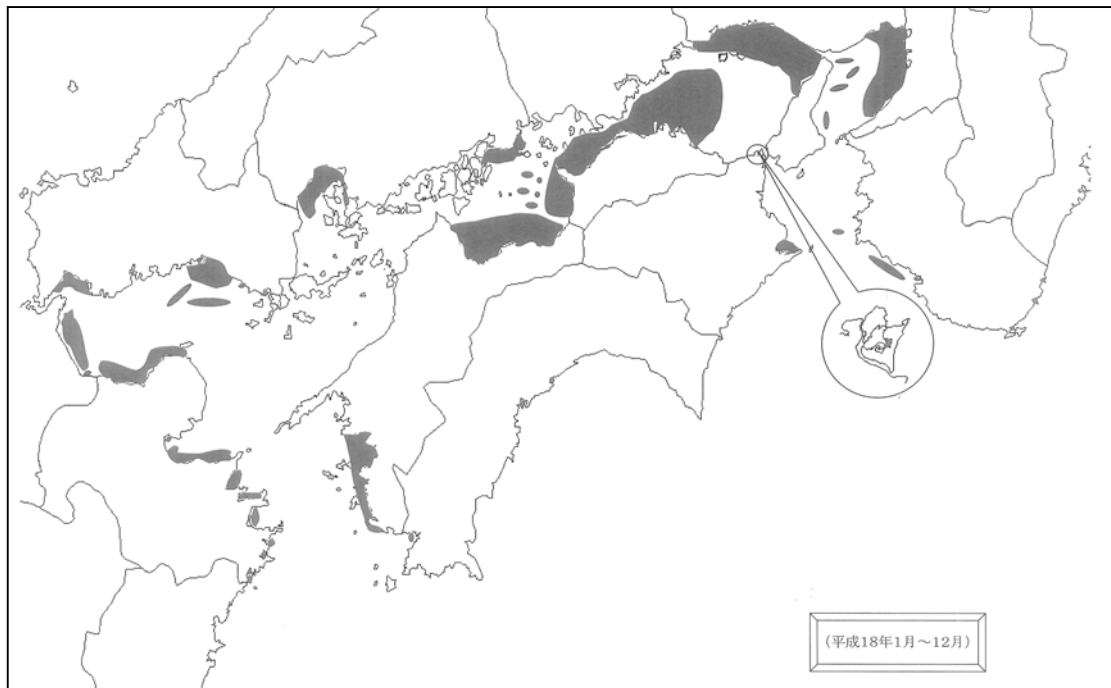
【図3 - 54 瀬戸内海のCODの推移】

せとうちネット「自然環境に関する情報」より作成
詳細は資料3 - 13を参照



【図3 - 55 瀬戸内海の赤潮確認件数の推移】

水産庁瀬戸内海漁業調整事務所「瀬戸内海の赤潮」より作成



【図3 - 56 赤潮発生海域（平成18年）】

出典：水産庁瀬戸内海漁業調整事務所「平成18年瀬戸内海の赤潮」